

※最新版は、

https://www.nise.go.jp/nc/report_material/research_results_publications/leaf_series
から直接ダウンロードできます。



特別支援教育リーフ Vol.4

多様性の理解につながる「障害理解」



「ちがい」を認め「よさ」に気付けるようになることを目指して

障害のない子供への障害理解を目的とした教育は、障害のある子供と共に学べるようになることのみを目指した教育ではありません。多様な他者と望ましい人間関係を築き、協働できる子供を育成することこそが、最終的に目指すところです。このような教育活動は、体験や講話などのイベントだけで終わらせることなく、日常的に取り組むことが重要です。

- ◆障害理解を目的とした教育は、様々な機会をとらえて繰り返し取り組むことが大切です。
- ◆障害に限らず、多様な人々と望ましい人間関係を構築し、協働できるようになることを目指しましょう。

現代の学校で求められる「障害理解」

今の時代を生きる子供たちが「障害」に接しないことはありません。ほとんどの学校には、障害等により特別な支援や配慮が必要な子供が通常の学級や特別支援学級に在籍しています。街のバリアフリー化が進み、公共交通機関を利用する障害者もたくさん居ますし、街中で障害者とすれ違うこともあります。パラスポーツの普及などで、障害者が活躍する姿をテレビやSNSで目にすることも多くなりました。

このような社会で生きる子供たちに対して、障害理解を目的とした教育は数多く実践されています。例えば、車椅子を活用したりアイマスクや耳栓をしたりする体験を中心に据えた授業、障害者施設を訪問し障害者と接する授業、当事者の話を聞く授業、著名な障害者のライフヒストリーを題材にした授業などは、皆さんも実際に行ったことがあるのではないのでしょうか。これらの教育活動を通して、皆さんはどのような教育的効果を実感しているのでしょうか。障害理解を目指した教育は、子供たちにどのような影響を与えるのでしょうか。

「障害理解」を目的とした教育は何のため？

障害のない子供たちに対する障害理解を目指した教育実践は、障害のある子供が同じ学級で居心地よく学ぶことにつながります。交流及び共同学習において適切な態度で接することができれば、特別支援学級や特別支援学校の子供も安心して共に学べます。障害のない子供への障害理解を目指した教育は、障害のある子供が共に学ぶために大きな意義があることは言うまでもありません。一方で障害のない子供にとっては、どのような教育的意義があるのでしょうか。障害のない子供への障害理解を目的とした教育の目指すところは、様々な障害に詳しい子供を育てることではありません。子供たちが、自分と他者との「ちがい」を理解し、その「ちがい」を受け入れ、お互いの「よさ」に気づき、それぞれの強みを生かして共に助け合う態度・行動が取れるようになることを目指します。

「ちがい」を認め「よさ」に気付くために

障害理解を目的とした教育は、先に挙げた教育活動（体験や講話等）でないといけないものではありません。むしろ日々の指導の中でこそ、実践する意義があります。例えば、交流及び共同学習として特別支援学校の子供と一緒に活動する前に行うことで、障害のある子供にとっては安心して学習できる環境が整うだけでなく、障害のない子供にとっては知識と体験が結び付き理解が深まります。もちろん障害のある子供が同じ学級に在籍していれば、様々な取組を日々の教育活動の中に織り込むことが可能でしょう。

また、障害理解を目的とした教育で育成を目指す資質・能力は、障害そのものを題材にした授業でしか育成できない訳ではありません。自分との「ちがい」について正しい知識を獲得し、人には様々な側面があることを理解し、相手の「よい」ところを見付けようとする態度や他者と協働する力を身に付ける機会は、日々の指導の中にたくさん見付けることができます。皆さんの担当している学級では、多様な特性や背景のある子供たちが学んでいると思います。一緒に学校生活を送り、同じ学級で学んでいれば、子供たちはそれぞれの「ちがう」部分に気が付くはずで、そのタイミングこそが、子供たちが学びを深める機会なのです。自分と「ちがう」側面がある人に対して偏見をもたないよう正しい知識を伝えたり、誰もが必ずもっている「よい」ところに気付くような場面を作ったり、力を合わせることで達成できる課題を設定したりすることで、障害などの一側面にとらわれず望ましい人間関係を構築することにつながります。このような態度や行動は、特別の教科道徳「親切、思いやり」「相互理解、寛容」「公正、公平、社会正義」「よりよい学校生活、集団生活の充実」や、特別活動「よりよい人間関係の形成」とも重なるものです。

これからの時代を担う子供たちに必要な資質・能力

日本においては、個人の満足感や自尊心の高まりを追求する北米とは異なり、他者との良好な関係性や周りの人との調和、身近な人の幸福（自分だけでなく周りの人も楽しい気持ちでいること）が自分自身の幸福につながるという協調的幸福（内田由紀子、これからの幸福について、新曜社、2022.）の文化が根付いています。つまり、障害のある子供も含め、全ての子供が居心地よく学べるようになることは、クラス全員（もちろん先生である「あなた」も）の幸福感にも影響を与えるのです。さらに、子供たちがお互いのよさに気づき、それを伝え合い、学級の中で一人一人の強みが発揮されれば、みんなの幸福感はもっと高まるでしょう。

今後ますますグローバル化や技術革新が進んでいけば、様々な文化や価値観を背景とする人々と相互に尊重し合いながらも、自分らしい生き方を育むことが必要となります。偏った考え方へ陥らないように正しい知識を獲得し、その人の一部分だけを見て決め付けることをせず、相手の立場に立って考え行動できる態度は、多様な他者との協働が求められるこれからの時代を担う子供たちにとって、最も重要な資質・能力の一つではないでしょうか。

☆さらなる理解のために☆

「障害の社会モデル」

心身機能に何らかの障害がある人は全員「障害者」なのでしょうか。例えば、足を骨折して車椅子を利用することになった人は「障害者」なのでしょうか。

現在では、「障害」は個人の心身機能の障害だけでなく社会的障壁との相互作用によって生ずるとされています。先ほどの例に当てはめれば、車椅子に乗っているから「障害者」ではなく、日常生活を送る建物が階段しかない（または段差がある）場合に「障害者」になります。つまり、「障害」は社会がつくり出している側面もあるのです。逆に考えれば、一人一人の障害理解が進み社会が変わることで、「障害」が「障害」でなくなることもあるということです。このような考え方を「障害の社会モデル」と言います。（一方、「障害」を個人の心身機能の障害によるものとする考え方を「医学モデル」と言います）。障害理解を目指した教育活動を実践する際には、「障害の社会モデル」の視点を踏まえて取り組むと良いでしょう。

<参考情報>

○国土交通省 [こころと社会のバリアフリーハンドブック 3,4ページ](#)

学校での一場面を例にとり、医学モデルと社会モデルとを比較し、解決方法を提案していません。



○愛媛県 [心のバリアフリー愛顔の接遇マニュアル 障がいの社会モデル 4,5ページ](#)

医学モデルと社会モデルの考え方について、生活場面を用いて分かりやすく紹介しています。



○文部科学省 [心のバリアフリーノート 小学生用 13ページ](#)

いろいろな人が生活する社会の中にはたくさんの困る場面や環境があることを知り、それらを解決するために社会モデルの考え方が有効であることを理解するための児童向けの教材です。



○東京都福祉保健局東京都心身障害福祉センター [リーフレット「障害の理解のために」](#)

各障害について、イラストを活用しながら詳しく説明しています。



○社会福祉法人全国社会福祉協議会障害者関係団体連絡協議会 [パンフレット「地域での支え合いー障害理解への第一歩ー」](#)

各障害について、困っていることや必要な支援を、簡潔に1枚でまとめています。



★NISEのホームページ

<https://www.nise.go.jp/nc/>



編集 情報・支援部

TEL 046-839-6803 (代表)

初版発行 令和5年3月